

土地の気配、場所の記憶—大口玲子

「1099日目」（塔短歌会・東北）が刊行された。副題は「東日本大震災から三年を詠む」となつており、「99日目」「366日目」「733日目」に続く四冊目。震災後「九十九日目」の後は年に一度出される小さな冊子である。震災から「二年目」「三年目」ではなく、「733日目」「1099日目」。震災が起きた日を年に一度の記念日として扱わず、今も続く「震災後」の一 日一日を丁寧に見つめようとする志を感じる。読者としても、自分自身の「1099日」を振り返り問い合わせなければという気持ちになる。

塔短歌会の東北に関わるメンバー十八人が十首ずつを寄せ、作者名と共に居住地や出身地が記されている。地名が作品を理解し味わう手がかりとなっているのはもちろんだが、今回は各作者のテーマと土地の個性とが密接に絡み合う作品が印象深かった。

・勢ふも掠るるもあり廃棄物最終処分地反対の署名

・深山岳 田代岳 下原 候補地より澄みとほる水あふれて流る

・水芭蕉咲きぬき田代峠より沢を目指して臂で滑れば

・きみどりの花絆あまた垂らしつつ沢胡桃桜ちぬ水のけはひに

梶原さい子（宮城県氣仙沼市出身 宮崎県大崎市在住）

原発事故で出た指定廃棄物の最終処分場として、宮城県内の何ヶ所かが候補地となつてゐる。反対署名のそれぞれの筆勢に注目する一首目。候補地とされていいる土地が豊かな水源地であるこ

とを詠んだ二首目は、候補地の一つ一つの地名を愛おしんで詠み込んだ。三・四首目、そこに生きる水芭蕉や沢胡桃のしつとりした存在感や気配がありありと浮かんでくる。作品の中心となつてゐるのは人間ではなく、その土地を潤す清浄な水や空気、そこに生息する植物たちである。

・断水の日々この坂に列なしで殿様の井戸に水を汲みにき

・城山に新しい家が増えゆけば我は殿様の井戸を見失ふ

小林真代（福島県いわき市在住）

・空をうつす田の面と空とに挟まれて五月の谷に生者のみ動く
・シンドキ折り採れば立つ香にしばしの間カネやイノチの話を忘る

佐藤陽介（福島県須賀川市在住）

・四年ぶりに職安に来つ被災者か否かを分ける欄できており

・履歴書を書く 震災時知らぬ人にまぎれて一人寝た図書館で

田宮智美（宮城県仙台市在住）

小林作は、地元の「殿様の井戸」との新たな関係を歌つてユニークである。震災時に並んで水をもらつた記憶と、震災後にどんどん変わつてゆく街の風景は、平時には思いもしなかつたものだろう。林业に従事する佐藤が、大自然の中で労働する自分の存在と共に意識するのは、震災による死者である。そして、震災後に生じた「カネやイノチ」の問題を一時的に忘れさせてくれるのは、その場で鮮やかに香る山菜であつた。田宮作は、震災後の生活の不安を具体的に詠む。震災がなければ、図書館という場所で寝泊まりしたり履歴書を書いたりすることもなかつただろう。具体的な一つ一つの場所が、震災後につれまでとは全く違う気配や記憶をまとうようになったことの痛切さを思つた。